

## 上代語「終止なり」研究の問題点

仁 科 明

### 0. はじめに

本稿は、上代語の「終止なり」に関する問題点を洗い出し、整理しようとする試みである。「終止なり」に関しては、上代語におけるありかた（例は多くない）についても、中古語との違いについても——その意味や働きについては未だはっきりしているわけではないけれど——、これまでの研究によって、重要な事実が多く明らかにされてきている。しかし、近年の議論でも、それが必ずしも共有されていないようであり、そもそも、困難が何処に存するのかという点について、論者間で一致できていないように思える。こうした現状認識が正しいとすれば、由々しい事態と言わねばなるまい。議論の共通の基盤を提供することが望まれる。これまでに、どこまでのことが明らかになっており、何が問題なのかを明確にする必要がある。

以下、次のように論述をすすめる。まず、事実の整理を目指して、「終止なり」の用法分類とそこで問題になる例を指摘し（第一節）、また、現在までに判明している構文的特徴についても整理をしておく（第二節）。つづいて、「伝聞・推定」説と「詠嘆」説の対立と呼ばれるものについて、何が対立点となっているのかを示した上で、それぞれの立場において、問題になるのがどのような点であるのかについて示していく（第三節）。

上代語の「終止なり」について答えは出せないけれど、こうした議論を通して、何が問題であるのかについては、ある程度、明らかにできるのではないかと考える。

### 1. 用法分類と問題点

#### 1.1. 用法分類

「終止なり」の主な用法は、名称や意味理解に違いはあっても、大きく三つに分けて考えられてきた。名称に違いはあっても、三分することそのものには異論はないようである<sup>1)</sup>。ここではそれらを、a)「事態の感覚による把握」、b)「推定」、c)「伝聞」

として概観した上で、分類のむつかしいもの(=d))についても触れることにしたい。

#### a) 「事態の感覚による把捉」

まず、a)「事態の感覚による把捉」を見よう。「現在の個別具体的な事態<sup>2)</sup>を(視覚以外の)、話し手の感覚によるものとして描写する」用法である、と言い換えることも出来る。三用法のうち、上代でまとまった数の用例を拾うことが出来るのは、この用法だけである。「なり」を分出している動詞の表す動作や変化は、「音」を伴うものであることが多い。<sup>3)</sup>

- ・ますらをの鞆の音すなり(鞆乃音為奈利)ものふの大臣楯立つらしも(万76)
- ・我が背子が古家の里の明日香には千鳥鳴くなり(乳鳥鳴成)妻待ちかねて(万268)
- ・聞きつやと妹が問はせる雁がねはまことも遠く雲隠るなり(雲隠奈利)(万1563)
- ・巨椋の入江とよむなり(入江響奈理)射目人の伏見が田居に雁渡るらし(万1699)

次のような例は、上に見た純粹に聴覚によってのみとらえられる事態とは異なり、事態存在が厳密には感覚によってだけとらえられているとは言えず、「推論」ないし「解釈」が働いていると見て、「推定」の一角とみなす立場はあろう。けれど、むしろ、常識的に、ここに入れて考えることが出来るだろう。

- ・天の川相向き立ちて我が恋ひし君来ますなり(君来益奈利)紐解き設けな(万1518)
- ・湯羅の崎潮干にけらし白神の磯の浦回をあへて漕ぐなり(敢而滂動)(万1671)<sup>4)</sup>

なお、「聴覚」と結びつけずに「感覚」と読んでいるのは、次のような例が存在するためである。

- ・秋田刈る苦手動くなり(苦手搖奈利)白露し置く穂田なしとつげに来ぬらし(万2176)

一応、「聴覚」と結びつけた理解も可能であるが、「気配」などによってとらえられていて、特定の感覚とは結びつけられて意識されていない可能性もあるように思う。中古以降の和歌の例について鎌倉(2001)や小柳(2002)が指摘する<sup>5)</sup>、次のような例

1) 中古の例なら、これに「婉曲」を加える立場もあろう。

2) 次の例を見ると、連体法では、必ずしも「現在」とは言えないか見える例がある。

・さ雄鹿の鳴くなる山を(鳴奈流山乎)越え行かむ日だにや君がはた逢はざらむ(万953)

しかし、これも、現状の描写との理解が可能であろう。一方、小柳(2002)によれば、中古の和歌では、個別具体的とも言い難い例が存在するようである。

・野辺ちかく家居しせればうぐひすのなくなるこゑは朝な朝なきく(古16)

3) 岡崎(1989)やそれを承けた小柳(2002)が「聞音」と呼ぶのは、この事実による。

4) 万1671(類例として2015)には異訓があり得るから確例とは云えないが、「終止なり」で訓んでも不自然ではない箇所であり、そう訓んだ場合には前の二例と同様に考えねばならないところからここに挙げておく。

## 上代語「終止なり」研究の問題点

——「聴覚」以外の感覚に基づくとみなされる例——の先駆けとみられはしないかと考えるのである。

- ・わが上に露ぞおくなる天の河門わたる舟の櫂のしづくか (古 863)
- ・わが袖に露ぞ置くなる天河雲のしがらみ波や越すらん (後撰 303)
- ・やどごとに花橋ぞ匂ふなる一木がすゑを風邪は吹けども (金葉 149)

## b) 「推定」

b) 「推定」に分類するのは、表現される事態そのものは話し手の感覚でとらえられるものとは言い難く、事態に到達するまでに「推論」が介在すると考えざるをえない例である。すでに上で検討した例 (万 1518 など) をのぞいてしまうと、「終止なり」が推定を表したとみなせる例は、管見のかぎり万葉集や記紀歌謡には見出せない。古事記に次を探ることができるだけのようである。

- ・是に父答へて曰はく、「是は天皇に坐すなり。…」 (於是父答曰是者天皇坐那理[此二字以音]…)

(応神記 250)

「なり」は仮名書きされているが、上接動詞の語尾が分からず、厳密には終止形であるのかどうか、そもそも何と読まれるべきかも分からない。現代語の「のだ」にうつせるような文脈にも見えるから、「連体なり」と解釈したくもなる例ではある。しかし、この時代、「連体なり」が未発達であったとされることからすると、「終止なり」と考えざるをえないであろう。「終止なり」であるとすれば、他人から聞いた話を元に話題の人物が天皇であることを述べる文脈であり、a) と考えることはむづかしく、「推定」とせざるを得ない<sup>5)</sup>。

なお、ここでは用例があまりにも少ないために、大雑把に b) 「推定」として区切っているが、厳密には、次の二つを区別すべきであろう。すなわち、手持ちの事態 (感覚的に把握可能な事態) からの推論あるいは「本体把握」 (大鹿 (1995)、大鹿 (1997)) を表すタイプと、「不確かな断定」とでも呼ぶのが適当なタイプである。どちらも、a) からの拡張と見られるが、拡張の方向が異なる。前者は、a) 用法において、感覚的にとらえられる事態の範囲が広くとらえられ、とらえられた事態を痕跡ないし兆候とする、背景事態の描写までがなされるようになったものととらえられるものであり、後者は、「話し手の印象でしかない」ということを元に「不確かな断定」とし

5) 用例は異なるが、小松 (1955a) にも挙例がある。

6) 例えば、小学館の新編古典文学全集 (山口佳紀・神野志隆光校注) の頭注でも、この「終止なり」が「推定」である旨、明記されている。

て用いられたものを指す<sup>7)</sup>。中古で指摘される「婉曲」用法に連続するのは後者のタイプかと思われる<sup>8)</sup>。上の、古事記の例は判断がむつかしいが、この時代、b)「伝聞」用法もじゅうぶんな発達をみていないことを勘案するならば、後者のタイプと判断すべきであろうか。

### c)「伝聞」

c)「伝聞」に分類するのは、表現される内容(事態・情報)を話し手が他人(特定の場合も不特定多数の場合もあり得る)から得たことを、「終止なり」を用いることによって明示的に表現しているような例である。

万葉集で「終止なり」が「伝聞」を表した例として指摘されることがあるのは、後に見る万1689の例をのぞくと、次の二例にかぎられるかと思う。

- ・汝をと我を人そ放くなる(人曾離奈流)いで我が君人の中言聞きこすなゆめ(万660)
- ・…下思に嘆かふ我が背古ゆ言ひ継ぎ来らし世間は数なきものそ慰むることもあらむと里人の我に告ぐらく山辺には桜花散りかほ鳥の間なくしば鳴く春の野にすみれを摘むと白たへの袖折り返し紅の赤裳裾引き娘子らは思ひ乱れて君待つとうら恋すなり(宇良呉悲須奈理)  
(万3973)

これらの例は、同じタイプの例だと考えられるが、特に、第二例(万3973)にかんしては、「伝聞」とは考えにくい。上の引用からも明らかなように、当該の「なり」文は、「告ぐらく」以下の引用内の句なのである<sup>9)</sup>。このような環境で、「伝聞」のマークを使う理由は考えにくい。自分が耳で捉えた事態を報告しているのだ、と考えるべきかと思われる。とすれば、「現在」というには感覚された事態と発話時点が離れている、これらの例もa)あるいはa)の特殊ケース<sup>10)</sup>とみなすことができようかと思う。

では、上代に「伝聞」の例が認められないかといえば、必ずしもそうではない。次に挙げる続日本紀宣命の例がそれであろう。

- ・…礼(るや)無く逆(さかしまに)在る人ども在て計(はかる)ならく…  
(…無礼<sub>ス</sub>逆在<sub>人</sub>在而計<sub>ス</sub>…)(続紀宣命第十六詔/再掲)

この例も表記の性質上、上接の用言の活用形が明示されていないが、「終止なり」が

7) 尾方(1995)の「聴覚認知に基づく推定」と「話し手の個人的判断」がこれに近い区別かと思われる。

8) この辺りの区別は(厳密に区別することはむつかしいけれども)、現代語の「ようだ」などの用法とその分化を考える際にも重要ではないかと思う。

9) この事実から、必ずしもこの例が「伝聞」とはみなせない旨を述べている議論としては例えば原田(1955)がある。

10) 典型的なa)との違いを示すために、a)「報告」を設けてもよい。

## 上代語「終止なり」研究の問題点

ク語法で用いられたものと考えざるを得ないものである。さらに、すぐ上の万葉集の例とは異なって自分の見聞した事態とは解釈できないから、「伝聞」とせざるを得ない例である。平安時代の訓点資料にク語法の「～ならず」が現れることについては指摘がある<sup>11)</sup>が、その先蹤とみるべきものだろう。

## d)分類のむつかしいもの

まず例を挙げておく。

・荒磯辺につきて漕がさね杏人の浜を過ぐれば恋しくありなり(戀布在奈利)(万1689)

この例は、そもそもどう訓むかにも問題があり、歌意も確定しないようであるが、ここでの「終止なり」を「伝聞」として理解して、「沖を通ると、恋しくなるということだ」などと解釈することもあるようである。しかし、竹田(1986)も指摘するように、そのように理解した場合、他例との齟齬が大きい。「伝聞」として解釈した場合、表されている事態は一般論ということになりそうだが、「終止なり」は上代では圧倒的に個別具体的な事態にかたよって用いられており<sup>12)</sup>、この点は、すぐ前でc)に分類した例でも同様なのである。

一方で、a)に引きつけた理解も可能であるようにも思える。上でa)の例を見た際に、「感覚による事態把握」として、「聴覚」から切り離しておいた。無意識にわき上がってきた感情を、感覚と同じ枠でとらえたものとみることも出来るのではないかと考えるのである。しかし、このような処理も、「感覚」と「感情」を同列に扱えるかどうかという点に問題を残すことになる。

この例に関しては分類困難な例として残して措かざるを得ない。もちろん、「終止なり」をどのような形式と考えるかによって、この例の理解が分かれてくることになる。また、「伝聞」と考えることの妥当性を検討するためには、中古の「終止なり」の「伝聞」用法の広がりを検討し、連絡を考える必要もあるであろう。

## 1.2. まとめ

前項において、上代の「終止なり」の例について、簡単に整理した。問題点を二つ、指摘しておこう。

まず、第一に、これは再三にわたって指摘されてきたことであるが、万葉集の例を

11) 築島(1969)。中田(1966)の指摘が早いそうであるが、筆者は確認できていない。

12) 問題になりそうなのは、「推定」に分類した古事記の例であるが、これも具体的とは言えぬまでも個別的な事態であろう。

見るかぎり、用例はすべて a)「感覚による事態把握」に解消して考えることが可能であり、b)「推定」、c)「伝聞」の確実な例を求めることができないということである。上代の例では——もともと用例が多くないとはいえ——、和歌を離れても、b)c)の用例は僅少である。これを素直に考えるならば、a)「感覚による事態把握」の用法の存在が、b)c)の用法の出現に先行した、という理解が穏当である、ということになるだろう。どのような立場に立つにせよ、この点は認めざるをえないのである。しかし、同じ事実を反対の面から言えば、上代にあっても、和歌や歌謡以外の資料では、少ないながら b)c)と考えざるをえない例が認められるということになる<sup>13)</sup>。歌と歌以外の例では用例のあり方が異なる可能性があり、この点に関しては中古と類同の問題<sup>14)</sup>が上代においても考えられねばならない、ということである。

第二に、「伝聞」「推定」などの用語で呼ばれるものの内実はどんなものであるのか、その意義規定を考え直す必要がありそうだということである。これらの用語を厳しく規定するか、緩く規定するかによって、上代の例に「伝聞」や「推定」の例がどの程度あるか、という判断に大きな揺れが生じてしまう。また、平安時代の実態との関係をとらえるためには、「伝聞」「推定」といった大まかな分類では事実をとらえ損なう可能性があるのではないか。「推定」については上で簡単に私見を述べたけれど、「伝聞」に関しても、いくつかに分けて細分することが可能であるように思う。「感覚による事態把握」あるいは「聴覚描写（聞音）」の用法もふくめて、概念規定を練り直す必要がある<sup>15)</sup>と思われるのである。

## 2. 構文上のふるまい

### 2.1. 分出される活用語の意味制限

「終止なり」の分出される活用語に、意味の上で強い制限があることはしばしば指摘されてきた。すなわち、音を発する動きにかたよるとの指摘である。前項の分類 a)で、「聴覚」に関わる事態に圧倒的にかたよるとしたのは、このことを言い換えたものだったのであり、後に見る「伝聞・推定」系の理解の根拠も、ここにあるといっただよい。<sup>16)</sup>

13) 「伝聞・推定」系の理解を否定する論者は、上代に b)c)の例（特に万葉集以外の例）があることを無視する傾向にあるようである。

14) 和歌と散文を区別して論ずべきだとの提言は小柳（2002）にみられる。

15) もちろん、中古の資料で「婉曲」のような用法を認める場合には、その概念の検討も必要になる。

16) ただし、しばしば指摘されるように、中古において「推定」に分類される用法では、動詞に意味の制限はなくなる。

## 上代語「終止なり」研究の問題点

ただし、このような限定が「終止なり」の性格からきているものであるのかについては議論が分かれるところである。例えば、次のように考えることもできよう。対にして扱われることの多い「みゆ」が明らかに「視覚」と結びついている以上、視覚的にとらえられる事態は表現できず、それ以外の感覚では聴覚が優先するのは当然なのだ。

実際、聴覚と結びつける必要のないと思われる例も a)には存在していた。そうした例を根拠に、聴覚と結びつけることを否定する議論もある<sup>17)</sup> けれど、いずれにせよ、大きなかたよりが存在する理由を説明する必要はあろう。

## 2.2. 分出活用形

「らむ」「らし」「べし」とともに終止形分出の複語尾として扱われる「終止なり」であるが、上代においては前三者と異なる振る舞いをする事が知られている。つまり、「らむ」「らし」「べし」が、ラ変型の活用をする語の場合に限って連体形から分出されるのに対して、「終止なり」（と「みゆ」）の場合にはラ変型の活用語からも終止形分出を崩さないのである。万葉集に関しては、ラ変型の活用語の終止形から分出された確例がないが、万葉集を離れると、次のような例を採取することができる<sup>18)</sup>。

・葦原中国は、いたくさやぎてありなり。(葦原中国者、伊多玖佐夜芸帝阿理那理〔此十一字以音。〕)

(神武記 154)

上代の「終止なり」の大きな特徴であるから、よく知られた北原(1966)の複述語構文の提案をはじめとして、この点については、さまざまな議論が試みられてきているけれど、じゅうぶんな説明は与えられていないように思える<sup>19)</sup>。

## 2.3. いわゆる「相互承接」の問題

これは竹田(1986)が強調したことであるが、上代の「終止なり」は「り」「たり」以外の複語尾と関わる事がないという事実がある。「む」「らむ」「じ」や「らし」のように、相互承接において最下位に来て、他の複語尾を分出することがない複語尾は珍しくない。しかし、「なり」は他の複語尾からも分出されないのである。このような特徴を指して竹田(1986)は「助動詞の相互承接の枠からはみ出している」とし

17) 最近では例えば鎌倉(2001)。聴覚と結びつくか否かの判断が本稿と比べてかなり厳しい。

18) 「みゆ」についても例を挙げておく。

・海人娘子玉求むらし沖つ波恐き海に舟出せり見ゆ(船出為利所見)(万 1003)

19) このあたりをめぐる問題は、第3節でも触れる。

た。この点において、上代語で「終止なり」としばしば対比して扱われる「みゆ」がふるまいを異にしていることは注意して措いてよかろう。しばしば指摘されることだが、次のように、「つ」を分出する例が認められるのである。

- ・汝が恋ふる妹の命は飽き足りに袖振る見えつ（袖振所見都）雲隠るまで（万 2009）
- ・…阿胡の海の荒磯の上に浜菜摘む海人娘子らがうながせる領巾も照るがに手に巻ける  
玉もゆららに白たへの袖振る見えつ（袖振所見津）相思ふらしも（万 3243）

また、この事実は、中古語との大きな違いになっている。中古語の「終止なり」（と「めり」）は「べし」や、用例数は多くないが、「つ」「き」などに関わっているからである<sup>20)</sup>。

#### 2.4. 通常の言い切り・連体法・ク語法・接続法

「終止なり」は、文末での終止法はもちろんであるが、それ以外の環境にも現れ得る。まず、連体法に比較的自由にあらわれる点は特徴とってよい。

- ・闇の夜に鳴くなる鶴の（鳴奈流鶴之）外のみ聞きつつかあらむ逢ふとはなしに（万 592）
- ・朝開き入江漕ぐなる（伊里江許具奈流）梶の音のつばらつばらに我家し思ほゆ（万 4065）

中古以降では、連体法と「伝聞」用法との関わりが指摘されたりもするが、上代に関しては連体法であっても a) 用法ばかりである。

また、既に挙げた一例のみであるため判断は下しにくいだが、ク語法も可能である<sup>21)</sup>。

- ・…礼（ゐや）無く逆（さかしまに）在る人ども在て計（はかる）ならく…

（…無礼<sub>み</sub>逆<sub>さ</sub>在<sub>人</sub>在<sub>而</sub>計<sub>は</sub>…）（統紀宣命第十六詔／再掲）

連体法が可能であり、また、ク語法が用言や用言によてまとまる句の体言化であると考えれば、準体法にもあらわれそうであるが、実例での採取は、むつかしいようである。もちろん、この辺りには多分に偶然の要素も関わっている可能性がある。

また、「ど」を伴って逆接条件句でも用いられたことが知られる。

- ・山のはにあぢ群さわき行くなれど（去奈礼騰）我はさぶしゑ君にしあらねば（万 486）

終止法以外にも比較的自由に現れるという事実は、終止法に大きくかたよる「みゆ」<sup>22)</sup>とは異なる点であって注意されてよかろう。

20) 中古での「つ」や「き」との関わりについては高山（1997）が詳しい。

21) 上述の通り、意味は、c)「伝聞」になるが、これについても一例では何とも言い難い。

22) 「みゆ」が終止法以外で用いられた例としては次があるが、訓法に問題を残す例である。

- ・東の野にかぎろひの立つ見えて（立所見而）かへり見すれば月傾きぬ（万 48）



## 2.5. 曲調終止（係結）

係助詞との関係では、「は」「そ」と関わるほかは、直接に関わった例がないことが指摘されている。このうち、「や」「か」と関わらないことについては、疑問文化がむつかしいものと理解することができよう。この点は、「特殊な断定」のような理解に有利な事実であるかも知れない。

一方、「こそ」と関わらないという点に関しては、すぐ前に見たように、「終止なり」が逆接条件句で用いられており、しかも、「こそ」と同じく卓立-断定の「そ」と結びつくことが可能であることを考えると、説明はむつかしい。この点については、竹田(1986)が述べるように、「こそ」と「そ」の卓立のあり方の違い、という面に原因を求める可能性もあろうけれど、資料の制約による偶然である可能性も否定できないであろう<sup>23)</sup>。

## 2.6. まとめ

個々の箇所でも述べたように、用例数の限定もあって、上に指摘した上代での構文的振る舞いが、どこまで重要な意味を持つものであるのかは判然としない。しかし、強調しておいてよいと思われる点はある。

第一に、これは竹田(1986)が強調したところであるが、他の複語尾との関わりなど、明らかに中古語でのありかたとは異なる面が存在するという点である。かなり中古語と上代語を一括して扱う議論も多かったように思われる。中古語とのつながりが説明できない議論はもちろん不可であるが、違いをもきちんと説明できる議論が求められる。

第二に、「終止なり」が必ずしも文末言い切りだけに現れる形式ではない、という点である。当たり前的事实であるが、意外に忘れられがちなのである。

第三に、文末言い切り以外の環境で用いられた場合でも、主としてa)の意味で理解されるということである。a)やb)の意味は、事態が(いま・この)話し手からとらえられた物として理解され、c)は必ずしもそうではないものとして理解される<sup>24)</sup>。中古になると、連体法で用いられた「終止なり」はc)で理解される割合が多くなる。中古のようなあり方は、「超越化」(野村(1991)など)の問題としてとらえることが出来よう。それに対して上代では、ク語法の例外一例(伝聞で解される)をのぞくと、

23) ちなみに、中古でも「や」「か」との呼応は多くないが、「こそ」との呼応は見られる。

24) a)にも問題のある例があった(注2)が、いずれにせよ、僅少である。

どのような環境であっても文末言い切りの場合と変わらない意味で理解されていることになる。上代語の「終止なり」の持つこのような特性を、「超越化」への反発とも呼んでおくことができそうである。

また、第四に、しばしば対にして扱われる「みゆ」と、「終止なり」のふるまいが違っている点も強調されてよいであろう（「つ」の分出と文末言い切りへの傾斜）。

少なくとも、これらの点については、一つの立場から同時に説明することが求められるであろう。

### 3. 「終止なり」の理解—「伝聞・推定」系理解と非「伝聞・推定」系理解—

#### 3.1. 対立の焦点

「終止なり」についてかつて、「伝聞・推定」の形式として理解する立場（「伝聞・推定」系理解）と、それを認めない立場（非「伝聞・推定」系理解<sup>25)</sup>）とが存在し、対立してきたことはよく知られている。前者は松尾（1919）に始まり、主流を占めており、近年の「証拠性 (evidentiality)」の形式としてとらえる理解もこの流れに位置づけることが出来る。後者については、近世以前の研究に淵源を持つものであり、遠藤（1955a,b）や塚原（1959）、少し毛色は異なるけれど、竹田（1986）をその一種としてとらえることができようかと思う（後述）。

それぞれの立場に立つ研究者の間で意見のやりとりが存在したため、一般に正反対のものにとらえられているようである<sup>26)</sup>。しかし、両者の議論は、論争の過程で収斂してきた面もあり、違いはそれほど大きくない。つまり、「伝聞・推定」系の理解といえども、第一節で a) 「事態の感覚による把捉」と呼んだ用法が存在（し、上代においては用例の大半を占拠）することを否定するわけではない<sup>27)</sup>し、非「伝聞・推定」系の理解であっても（特に平安時代以降の資料に）、b) 「推定」、c) 「伝聞」の用法が存在することを否定するわけではないのである。

とすれば、二つの理解の対立点も、一般に考えられているのとは別に考えねばならないことになるだろう。両者の対立とは、詰まるところ、①a)の用法を「聴覚」にか

25) 後者については、「詠嘆」説と呼ばれるのが普通であるが、もう少し広く理解したいこともあって、このような名称を用いる。

26) 特に、「伝聞・推定」説を否定しようとする立場の論者は、「伝聞・推定」系の理解を非常に狭くとらえて批判することが多いようである。

27) もちろん、かつて a) を「推定」用法 (=b)) の側に引きつける理解は存在したようだ。例えば松尾（1919）にも、この方向が示唆されているし、松尾（1952）などもある。けれど、現在、「伝聞・推定」系の立場に立つ論者は、そのような理解は採らないのが普通であろう。

## 上代語「終止なり」研究の問題点

かわる事態に限定するかどうかという点、そして、②a)とb)c)の用法のつながりを「事態を聴覚によってとらえること」に求めるかどうかという点に集約されるであろう。つまり、①と②を認めるのが「伝聞・推定」系の理解であり、逆に、①と②を否定するのが非「伝聞・推定」系の理解であると考えられる。<sup>28)</sup>

ほぼ一般化したといってよい「伝聞・推定」系の理解に対して、近年でも非「伝聞・推定」系の理解を採る論者は多い。どちらの立場にも利点と難点が存在するようである。本節では、以下、両者の難点がどこにあるのかについて見ていくことにしたい。

## 3.2. それぞれの問題点

## 3.2.1. 「伝聞・推定」系の理解の問題点

「伝聞・推定」系の理解は、前項のように理解するならば、現象に名前をつけたようなものである。したがって、事実の次元で問題が生ずることはほとんどないといってよい。しかし、述語体系や歴史的変化の中に位置づけてみると、説明できない点を残しているように思われる。

## その1. 述語体系の把握と「聴覚」

「終止なり」を「聴覚」と理解することには、上代には「みゆ」、中古には「めり」という形式が存在し、「視覚」と結びついて理解されたことが大きい。だが、「終止なり」「みゆ」(「めり」)の、述語体系への位置づけが十分になされてきたとは言い難いように思われる。「証拠性」の形式として位置づければよいではないか、と言われるやもしれぬ。しかし、「証拠性」の形式と呼んだとして、述語の体系の中でどのような位置を占めうるものであるのかについて、何ら説明したことはない。仮に「終止なり」や「みゆ」を「証拠性」の形式であると考えた時、それが、他の述語形式との間にどのような位置にあるのか、そして何故に終止形分出の複語尾としてあらわれるのか、という点には最低限答えることが必要である。

また、叙法論的な立場からの議論でも、位置づけは非常に困難である。叙法に関わる複語尾の意味と、分出される活用語の活用形の間に対応関係があるらしいことはしばしば指摘される。まず、未然形分出の複語尾は非現実の事態の表現に関わる<sup>29)</sup>。一方、連用形分出の複語尾は言い切りで用いられれば、既に起こったことを表すという

28) 対立のポイントをここに求めておくと、例えば、竹田(1986)や小松(1980)・小松(1987)、鎌倉(2001)のように、「詠嘆」説は否定する議論でも、「聴覚」を説明の中心に据えない点で、非「伝聞・推定」系の理解に分類される。

29) 橋本(1959)。

ことが出来る<sup>30)</sup>。そして、このような目で、終止形分出の複語尾としての「べし」「らし」「らむ」を見たときには、未然形分出の複語尾と連用形分出の複語尾の隙間を埋めるような形で、存在するととらえることができるだろう<sup>31)</sup>。このような位置づけを行った時、「終止なり」(や「みゆ」)は、複語尾の(ということは叙法の)体系の中に占める位置を持たないように思えるのである。

また、「終止なり」と「みゆ」は終止形分出の複語尾であるが、上に見た「べし」「らし」「らむ」がラ変型の活用語からは連体形から分出されるのとは異なり、ラ変型の活用語から分出される場合でも終止形から分出されていた(2.1.)。このことは、「べし」「らし」「らむ」が連用形分出複語尾と未然形分出複語尾の隙間を埋めるものとして理解出来るのに対して、「終止なり」「みゆ」がそうは理解できない事実と関わることも思える。

「終止なり」が述語形式の一つである以上、その意味を考えることの中には、次の点を考えることも含まれていなければならないと筆者は考える。すなわち、述語体系の中での位置を考察することであり、「伝聞・推定」系の理解からは、この辺りが明確になされていない、と、言わざるを得ないのである。

## その2. 歴史的理解——論点②の必然性

山口(1997)は、日本語において「伝聞」を表すとされる述語形式「終止なり」、「げな(くげなり)」、「そうだ(そうな)」の用法変化を検討する中で、三形式が共通に次のような用法拡張の過程を通過していることを指摘している。<sup>32)</sup>

つまり、三形式はともに、「推定」(ここでは上のa) b)を含む)のような意味を表す用法が早く存在し、その後に「伝聞」の用法が現れているとの指摘しているのである。特に「げな」や「そうだ」については、a)b)に当たる用法が必ずしも区別されないもので、はっきりしないけれど、「げ」「そう」の文法辞化以前の用法を考えるならば、「感覚的にとらえられた事態・様子の描写」から、「推定用法」へ、そして「伝聞」へという用法を拡張パターンを見て取ることができようかと思う。

細かい事実にはあらためて検討が必要だが、大きくこのような用法拡張が存することは誰しも首肯されるであろう<sup>33)</sup>。1.2.項で、「終止なり」についてa)「事態

30) 川端(1979)、尾上(1982)。

31) 終止形分出の複語尾の叙法に関するこのような位置づけについては、仁科(1998)、小柳(2004)を参照。

32) 「そうだ」「げな」の二形式について様態・推量の用法が早く、伝聞の用法の発生が遅れることの指摘は、仙波(1976)が早いようである。

## 上代語「終止なり」研究の問題点

の感覚による把握」用法が早く、c)「伝聞」用法の成立はそれに遅れると考えざるを得ないことを指摘しておいたが、日本語では、「感覚的描写」を行う形式の用法拡張によって、「伝聞」をも表すに至るといふ表現パターンが存在し<sup>34)</sup>、「終止なり」の用法のあり方も、そのような過程に沿ったものと理解されるわけである。

一方、上述のように、「伝聞・推定」系の理解は、a)用法を「聴覚」に限定してとらえ、c)用法(つまり「伝聞」)との関係を「聴覚」に関わるという共通性によって理解しようとしていた。しかし、後代の「げな」や「そうだ」が、語源からしても、元々の用法からしても「聴覚」との結びつきを持っていないことから考えて、少なくとも一般論としては、a)のような用法を持った形式が「伝聞」の用法を獲得するのに、「聴覚」に関わるという点は重要ではない、ということになる。もちろん、三形式の用法やその拡張過程には細かい点で違いが存するから、「終止なり」だけが別の要因で変化したとも考えられるけれども、「伝聞・推定」系の理解を非「伝聞・推定」系の理解から分ける点として挙げた、②の点を採用の必然性はなくなることになりそうである。

「伝聞」用法を本格的に拾えるようになる中古では、すでに a)用法に「聴覚」以外の用法が存在することが指摘されていた(1.2.を参照)ことや、「めり」にも「伝聞」の用法が指摘されたりしている<sup>35)</sup>ことから考えても、②の論点は維持しがたくなるのではないかと考えられるのである。

## 3.2.2. 非「伝聞・推定」系の理解の問題点

## ——文末言い切り以外の環境での出現への説明と意味の規定

一方、「終止なり」を聴覚と結びつけない議論(非「伝聞・推定」系の議論)にも問題が指摘できる。しばしば指摘されていることだけれど、現れる構文環境と、意味規定の関係に関わる問題である。

33) 現代語の「ようだ」も(制限は強いが)、「伝聞」を表し得ることを想起してもよい。

・新聞報道によれば、イラクでの戦闘はますます激しさを増しているようだ。

34) もちろん、日本語の「伝聞」の表現パターンがこうしたタイプにかぎられるわけではない。事実、「伝聞」は、古代なら「らむ」「らし」や「といふ」、現代語でも「らしい」など、「感覚描写」をしているとは考えられない形式でも表されている。

35) 尾方(1995)。「めり」の場合は、「終止なり」とは違って連体・準体法に限定され、かつ、「伝聞」の中でも特定のタイプのものにかぎられるようではある。ただ、次の例などは、あるいは「婉曲」として扱う立場もあるかもしれないが、土左日記冒頭の「男もすなる」が「伝聞」と解釈されるのなら、これも「伝聞」ということになる。

・「このごろの上手にすめる千枝、常則などを召して、作り絵仕うまつらせばや」と、心もとながりあり。(須磨 2-191)

「聴覚」との関わりを強調しない議論の場合、「終止なり」の意味やはたらきを、「詠嘆」とか「判断の確認」のようなところに求めることが多い。たしかに、こうした意味規定は、「終止なり」を終助詞に近い働きの形式としてとらえていることになる<sup>36)</sup>から、後に終助詞が続くことがないといった事実や、常に言い切りの形式としての「終止形」から分出される事実を上手く説明してくれているようにも見える。が、そこで用いられる「詠嘆」などの用語のあいまいさ<sup>37)</sup>、といった問題を措いても、大きな問題が残る。そもそも、「詠嘆」「断定」「確認」といった意味合いは、「文(内容)全体」に関わる意味であるといつてよいかと思う。とすれば、このような規定は、「終止なり」が文末言い切りでのはたらきを前提しているといつてよい。しかし、第2節で触れたように、「終止なり」は、連体句中など、言い切り以外の環境にも比較的自由に現れ得る。「終止なり」について「詠嘆」や「断定」といった規定を与える場合、文末言い切り以外に現れるという事実に関して、説明を与えることが必要になるはずだが、管見の限りでは、それに答えることができた議論はないようである。「詠嘆」などの意味規定を採ることは困難である<sup>38)</sup>。

では、「伝聞・推定」系の理解以外の仕方(すなわち「聴覚」との結びつきを強調しない仕方)で、かつ、「詠嘆」などの規定を採らない場合、いかなる意味規定が可能であろうか。この問題への解答として、竹田(1986)を位置づけることができるかと思われる。竹田(1986)は、万葉集の「終止なり」の出現する構文条件の検討の上に立って、「肯定的なことがらを所与的に受け入れる」ことを表し、一面において「持続アスペクト」を表す、という風に「終止なり」を把握しているからである。このような規定であれば、文末以外に現れた「終止なり」の意味についても説明を与えることが出来よう。「詠嘆」といった意味規定を採る立場が持っていた問題点を回避しながら、非「伝聞・推定」系の理解を維持しようとした議論とみることができるのである。

しかし、この議論にも、古代語における述語の時間的意味に関する研究から見ると、明らかな問題点が看取される。すなわち、古代語では「持続アスペクト」は動詞の基本形が分担していたことが明らかになってきた。もちろん、常に「持続アスペクト」を表したわけではないけれど、話手によってとらえられる動きの持続は動詞基本形が

36) 意味の面からだけでなく、他の複語尾と関わらないという性格から、終助詞と同じ層で働いているという判断がなされることがある。竹田(1986)、工藤(2003)など。

37) 高山(1990)に指摘がある。

38) 松尾(1936)が詠嘆説を否定するポイントの一つはこの点であった。

## 上代語「終止なり」研究の問題点

表したことは間違いない。「終止なり」が表す「持続アスペクト」との関係がはっきりしなくなるのである<sup>39)</sup>。事実、「終止なり」で終止する文と、動詞基本形終止の文は、述語に現れる動詞の種類(2.1.で述べたように、「終止なり」の方は意味の面からの限定がある)をのぞけばきわめて近い意味になる。この立場を維持するにせよ、基本形との関わりが明示されねばならないであろう<sup>40)</sup>。

つまり、「聴覚」と結びつけた理解を拒絶する非「伝聞・推定」系の理解では、文末言い切り以外への出現に関しても説明し得る、性格規定が必要になるが、この点について説得的に述べられている議論はいまだないように見えるのである。

## 4. 最後に——示唆される方向——

以上、上代語の「終止なり」を考える際の問題についてまとめてきた。最後に、求められる研究の方向を、まとめておきたい。

まずは、具体的な事実の整理に関してである。どうしてもなく実例は少ないが、上代語の「終止なり」は、用法の広がりの中でも、構文的な振る舞いに関しても、中古語とは異なっていることは事実である(第1節、第2節)。中古語との違いを意識しながら上代語と中古語の事実を整理し、連続を説明することが必要であろう。そのためには、中古語の「終止なり」や「めり」の記述に関して、「感覚的描写」「推定」「伝聞」「婉曲」といった概念の精緻化(場合によっては細分化)を行うことが必要になるろう。

つづいては、理論的な面(性格規定)についてである。まず、上代語の「終止なり」の説明にとって、もっともむづかしいのは、すべての活用語について終止形から分出されるという事実であろう。この事実は、構文面からも、意味の面からも、説明できたとはいえない状態にある(2.2、3.2)。「終止なり」が、どのような構文を構成しており、何故そのような構文が可能であるのか、そして、どのような意味を持つものなのかという点について、(なるべくなら歴史以前を前提しない形で)説明できる議論が求められるだろう。また、「伝聞・推定」系の理解も、非「伝聞・推定」系の理解も問題を残していた(3.1、3.2)。議論の当否は、述語(叙法)の体系全体への位置

39) このようにいうことは、竹田(1986)の言葉尻をとらえた批判と見えるかも知れないが、「肯定的なことから所与的に受け入れる」(52頁)といってみても、やはり基本形終止が眼前状況を描写する場合と重なるように見える。

40) 仁科(2003)での運動動詞終止・連体形に関する整理は、一つにはこの問題を考える準備をする意味もあって行ったものである。

づけを行えるかどうかにかかっているように見える。そのためには、他の終止形分出の複語尾（ラ変型の用言では連体形から分出される）との位置関係を示すこと、それから、話し手がとらえた個別具体的事態（の持続）という点では、重なりを持つ動詞基本形との関わりを示すことが重要になりそうである。

いずれも単純な問題ではもちろんない。これらすべてを自身の今後の研究課題として、稿を閉じる。

### [参考文献]

- 遠藤嘉基 (1955a,b) 新講和泉式部物語 (七) (九) (国語国文 24-2,7 1950.2,7)
- 大鹿薫久 (1995) 本体把握—「らしい」の説—  
 (『宮地裕・敦子先生古稀記念論文集 日本語の研究』明治書院 1995.11)
- 大鹿薫久 (1997) 助動詞「らし」について (語文 67 1997.2)
- 岡崎正継 (1989) 推定伝聞の助動詞「なり」について—その承接と意味— (國學院雑誌90-3 1989.3)
- 尾方理恵 (1995) 助動詞の形と意味—源氏物語中の「めり」「終止なり」—  
 (『築島裕博士古稀記念国語学論集』汲古書院 1995.10)
- 尾上圭介 (1982) 現代語のテンスとアスペクト (日本語学 1-2 1982.12)
- 鎌倉暄子 (2001) いわゆる伝聞推定の助動詞「なり」について—その本質と成立に関して—  
 (香椎潟 47 2001.12)
- 川端善明 (1979) 『活用の研究Ⅱ』(大修館書店 1979.2/清文堂復刊 1997.4)
- 北原保雄 (1965) <なり>と<見ゆ>—上代の用例に見えるいわゆる終止形承接の意味するもの— (国語学 61 集 1965.6)
- 工藤力男 (2003) 音韻と文法についての覚書 (岩波新古典文学大系『万葉集 4』解説 2003.10)
- 小松光三 (1980) 『国語助動詞意味論』(笠間書院 1980.11)
- 小松光三 (1987) 古文解釈と助動詞 (『国文法講座 2』明治書院 1987.4)
- 小松登美 (1955a) 指定の「なり」と伝聞の「なり」(上) (未定稿 1 1955.5)
- 小松登美 (1955b) 終止なり私見 (未定稿 2 1955.11)
- 小柳智一 (2002) 和歌における活用語接続のナリ  
 (『徳江元正退職記念 鎌倉室町文學論纂』三弥井書店 2002.5)
- 小柳智一 (2004) ベシ・ラシ・ラムの接続について—動詞の終止形— (國學院雑誌 105-2 2004.2)
- 仙波光明 (1976) 終止連体形接続の「げな」と「さうな」—伝聞用法の発生から定着まで—  
 (『佐伯梅友博士喜寿記念 国語学論集』表現社 1976.12)
- 高山善行 (1990) 連体ナリと終止ナリ—研究のながれとその意義—



## 上代語「終止なり」研究の問題点

- (『国語語彙史の研究』11 1990.12→加筆修正の上で高山(2002)に収録。)
- 高山善行(1997) 推定形式とテンス  
(大手前女子大学論集30 1997.2→加筆修正の上で高山(2002)に収録。)
- 高山善行(2002) 『日本語モダリティの史的研究』(ひつじ書房2002.2)
- 竹田純太郎(1986)「終止ナリ」の考察—上代の用例を中心として—(国語国文55-12 1986.12)
- 塚原鉄雄(1959) 活用語に接続する助動詞<なり>の生態的研究  
—王朝仮名文学作品を資料として—(国語国文28-7 1959.7)
- 築島 裕(1969) 『平安時代語新論』(東京大学出版会1969.6)
- 中田祝夫(1966) 文法と解釈(その十三)  
—伝聞推定の「なり」に未然形「なら」があるということ—(国語展望13 1966.6)
- 仁科 明(1998) 見えないことの顕現と承認—「らし」の叙法的性格—(国語学195集 1998.12)
- 仁科 明(2003) 「名札性」と「定述語性」—万葉集運動動詞の終止・連体形終止—  
(『国語と国文学』80-3号2003.3)
- 野村剛史(1991) 助動詞とは何か—その批判的再検討—(国語学165 1991.6)
- 橋本四郎(1959) 動詞の未然形  
(女子大國文15 1959.10→『橋本四郎論文集 国語学編』角川書店 1986.12)
- 原田芳起(1955) 伝聞推定の「ナリ」(国語国文24-7 1955.7)
- 松尾 聡(1952) 『古文解釈のための国文法入門』(研究社出版1952.1)
- 松尾捨治郎(1919) 小疑三束(國學院雜誌25-8 1919.8)
- 松尾捨治郎(1936) 『国語法論攷』(白帝社1936.9)
- 山口堯二(1997) 助動詞の伝聞表示に関する通史的考察  
(京都語文2 1997.10→山口(2003)に収録。)
- 山口堯二(2003) 『助動詞史を探る』(和泉書院2003.9)

用例調査と引用は以下による(表記は私意によって改めた部分がある)。

小学館古典文学全集『古事記・古代歌謡』(荻原浅男校注。歌謡は下掲書による。)／岩波古典文学大系『古代歌謡集』(土橋寛校注。歌謡番号も同書のもの。)／『萬葉集 訳文篇・本文篇』(佐竹昭広他・塙書房。国歌大観番号を付す。)／『寧楽遺文』(竹内理三編。東京堂出版)／『歌経標式注釈と研究』(沖森卓也他・桜楓社)／『續日本紀宣命 校本・総索引』(北川和秀編・吉川弘文館)／岩波新古典文学大系『古今和歌集』(小島憲之・新井栄蔵校注。国歌大観番号を付す。)／岩波新古典文学大系『後撰和歌集』(片桐洋一校注。国歌大観番号を付す。)／岩波新古典文学大系『金葉和歌集 詞花和歌集』(川村晃生・柏木由夫・工藤重矩校注。国歌大観番号を付す。)／小学館古典文学全集『源氏物語』(阿部秋生、秋山虔、今井源衛校注。巻名の後に巻数・頁数を付す。)

用例検索に当たっては以上のほか、以下の各書の恩恵を受けた。

高木・外山編『古事記大成 索引篇』(平凡社) / 大野晋『上代仮名遣の研究』(岩波書店)  
/ 正宗敦夫編『萬葉集總索引』(平凡社) / 小路一光『万葉集助動詞の研究』(明治書院)

また、予備調査の段階で次のテキストファイルの恩恵を被った。

吉村 誠氏作成による万葉集テキスト / 長瀬真理氏・加藤尚武氏・坂井昭宏氏による源氏物語のテキスト・データベース